
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

半澤 洵先生小伝 抜粋特別号

(ボランティアニュース No. 53～56 号から抜粋)

第1回	ボランティア ニュース No. 53	2019.06	-----	1
第2回	ボランティア ニュース No. 54	2019.09	-----	5
第3回	ボランティア ニュース No. 55	2019.12	-----	10
第4回	ボランティア ニュース No. 56	2020.03	-----	14

特別寄稿

半澤 洵先生小伝（1）－「納豆博士」と呼ばれた農学者の青年時代－

北海道科学大学 名誉教授 半澤 久

1. はじめに

札幌農学校を卒業し、北海道帝国大学農学部
の応用菌学講座を創設し初代教授となった半澤 洵
(じゅん) について、21 人いる洵の孫のひとり
として書くことになり、いまからほぼ 70 年前から
24 年間に祖父洵とともに暮らした頃のことを思い
出している。私が祖父と暮らしていたのは、祖父
が 70 歳以降のことである。

洵が、「納豆博士」と呼ばれるようになったこと
や新渡戸稲造博士が創立した「遠友夜学校」にそ
の開校から閉校まで 50 年間に亘り関与したこと
などを含め、祖父洵の 70 歳までの足跡については
資料や文献に頼りながら記すことになる。特に、
中浜康光氏と郷原康一氏がそれぞれ著された文献^{1), 2)}
や札幌市白石区老人クラブ連合会編『白石歴史
物語』³⁾、そして北海道大学大学文書館が所蔵し
ている洵に関連する資料や写真などは、貴重かつ

具体的な記録である。それらから、私自身が祖父
のことを再認識でき、本小伝作成のために多くを
引用した。

2. 伊達白石藩士の子として誕生

洵の祖父半澤時雍、父時^{これやす}中親子は伊達藩の支藩
白石藩主片倉小十郎邦憲の藩士であった。その宮
城の白石から北海道に移住したのは、1871 (明治
4) 年である。時中は、1853 (安政元) 年生まれで
当時 18 歳である。

伊達藩は、戊辰戦争で奥羽列藩同盟として明治
新政府軍と戦い敗れ、藩士は士分を失い、生計の
道がおぼつかない状況であった。伊達藩では、そ
の窮状を打開するため、当時明治政府が推進して
いた北海道開拓へ向け家臣団を移住させることと
なった。先陣を切ったのは現在の北海道伊達市地
域への移住、そして第二陣として石狩地域 (当時
は最月寒^{もつきさつふ}と呼ばれていたが、移住した 1871 年に

*半澤 久：1948(昭和 23)年札幌生まれ。1973(昭和 48)年 北海道大学大学院工学研究科 衛生工学専攻修士課程
修了後、2003(平成 15)年まで 株式会社竹中工務店技術研究所勤務。その間 1984(昭和 59)年～1986(昭和 61)年 デ
ンマーク工科大学 暖房空調研究所客員研究員。2003(平成 15)年～2016(平成 28)年 北海道工業大学(現北海道科学
大学)工学部建築学科教授。祖父半澤 洵が札幌遠友夜学校第 3 代校長であった縁で現在 2018(平成 30)年設立の札
幌遠友会再興塾会長。

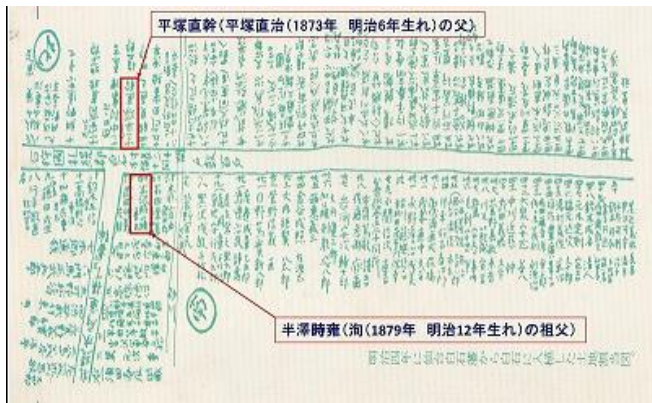


図1 1871(明治4)年に白石藩から石狩国札幌郡白石村に入植した100戸の土地割当図³⁾

白石村と命名された)への移住が行われた^{1),2),3)}。

洵の父時中ら石狩地域へ移住する片倉家の家臣達は、明治政府から北海道移住開拓使貫属(士族の身分を持って開拓使に所属)に任命され、開拓に従事することとなり、旅費などは政府から支給される事となった。そうして時雍、時中父子は、現在の札幌市白石区地域へ入植したのである。

それまでの道のりは、苦難の連続であった。宮城の白石から、家臣団157戸家族総勢604人が2班にわかれて出航した。海路函館へ向い、第一班(398人)と第二班(206人)は、函館で合流した。実は、第一班の乗船咸臨丸は、函館から小樽かんりんまるへ向け出航した直後に沖合で座礁した。乗員は全員なんとか無事救助されて、函館に陸路で戻っていた。その後第二班と合流し、その乗船庚午丸で函館を出港して小樽に上陸し、さらに陸路で張碓、銭函から石狩を経由して札幌郡白石村に到着した。家臣団のうち100戸が白石村に入植し、残りの57戸は手稲村に入植した^{1),2),3)}。このとき白石村に入植した中に、洵より6歳年上で札幌農学校での先輩であり、さらに生涯に亘り洵の活動に対して物心両面から大きな支援をした平塚直治氏(元帝國製麻会社役員)(1873(明治6)年~1946(昭和21)年)の父である平塚直幹氏がいた(図1)。

洵は、そうした境遇の中で父時中と平井家から嫁いだ母加代の第二子で長男として1879(明治12)年1月9日に白石村で誕生した。洵には姉がひとりと妹が3人いて、男子は洵ひとりであった。

3. 小学校から札幌農学校へ

時中は、洵が生れた1879年から開拓使勤務であ

った。1882(明治15)年には、家族は現在の札幌市中央区南2条東4丁目に転居した²⁾。洵は、ここから創成小学校(現在の札幌市資生館小学校の前身)に通い、1892(明治25)年に13歳で創成高等小学校を卒業し、ただちに札幌農学校予科19期生として入学をした。ここで洵は、当時米国とドイツ留学から帰国し札幌農学校の新進の教授となった新渡戸稲造博士31歳と出会ったのである。

現在なら中学校入学の年齢のときから新渡戸博士の薫陶を受けたのである。農学校予科の同期生には、有島武郎、星野勇三、森本厚吉らがいた(写真1、2)。



写真.1 札幌農学校予科卒業記念(1897年)
前列左から2人目半澤 洵、2列目左から2人目新渡戸稲造博士、3列目左から4人目有島武郎(星野勇三旧蔵写真帖) 北大文書館所蔵よりトリミング



写真.2 ピヤソン夫人聖書講義出席者記念(1898年)
前列左から2人目半澤 洵、2列目左端森本厚吉、3人目ピヤソン夫人、5人目有島武郎、右端星野勇三(星野勇三旧蔵写真帖) 北大文書館所蔵よりトリミング

また、教授陣には、佐藤昌介、宮部金吾、大島金太郎など札幌農学校初期の輝かしい歴史を築いた俊才達が揃っていた。洵は、そうした環境の中で勉学に励み、また友人達との交流を深めていたと思われる。そして、新渡戸博士が「遠友夜学校」を創立したのは1894（明治27）年の6月である。洵は当時15歳で、遠友夜学校の創立時から有島武郎ら同期生たちと共に同校の教師となっていた。弱冠15歳の少年たちにとって、新渡戸博士が提案し実践しようとした教育に対する理念は、非常に強く影響を与えるものであったことは想像に難くない。洵は、この遠友夜学校における新渡戸博士の教育の実践理念である「世の中のため、人のため」という考え方を、生涯の信条として持ち続け、そして自らも実践した。

有島武郎ら同期生との交友関係は、非常に厚いものがあつたと思われる。有島武郎の作品に「同級生」というのがある。これは、有島の札幌農学校時代の同期生について、彼の目を通しての姿が描かれている。

以下に、有島武郎全集 第15巻掲載「同級生」（筑摩書房）⁴⁾より一部を引用する。

「・・・で話替って此の大學に五人居る事は知らない人は知らないだらう。誰から槍玉に擧げるかな・・・兎に角此の五人の事を「ぬるま湯窯」と云う因縁を知つて居る人があるかい。知らずば云つて聞かさうが、ぬるま湯と云うものは上ると寒いものだ。五人の餓鬼も御扶持が上れば上る程寒い相だ・・・そんな湯になら這入らない方がいいなどとまぜ返してはいけない相だ。まぜつ返すと尚ほ寒くなるからな・・・中略・・・で、坊ちゃんとは相変らずおとなしくつて何かこちよこちよとやつて居る。シクロオーガニズムをいぢくつて居るとあゝなる者と見える。小児科の御醫者様が、いやににたにたするのと同じ原則に従ふものだらう。一寸例へてみれば同級會があつた晩でも唯は歸らぬ。サイダーの栓の裏を引つぱがして、コルクが黒くなつて居るのを見るとやたらに幾個でもポケットの中に押込んで行く。而して其の翌々日位先生の教室の黒板には、シクロコックス、サイダリイとか書いてあつて。生徒が手ぐすね引いてそれをノートダウンすると云う話だ

（話だよ）何しろ坊ちゃんの教室はかび臭いもんだ。其の中に端然と構へてアニリン色素か何かをいぢくり廻して居る處は、天晴れ植物學者の謀叛人だ。従つて化學の殉教者だ。そら見給へ物には何時でも二面がある。スキフトのアカデミー・オヴ・ラガドー⁵⁾と云うものをやらされたつげなあ。坊ちゃんのやつて居る事は、あすこいらから來たものではないかと思はれる。いまに胡瓜から日光が取れないとも限らないよ。諸君は坊ちゃんの雑草學と云う本を讀んだ事があるか、讀まなかつたら讀み給へ、買はなかつたら買ひ給へ。あれは坊ちゃんが植物學に永遠の訣別をする記念の出版で、マダム・ローランが首を切られたる前に慨然として「あゝ自由よ、汝の名によりて如何なる悪事かなされしぞ」と飴子吼したのと同じ調子の本だ相だ。悲壯な本ではないか。

以上、有島武郎「同級生」より一部を原文のまま引用。文末に明治44(1911)年4月23日の日付が記されている。

この作品の中で、洵は「坊ちゃん」のニックネームで記されている。探究心旺盛で研究熱心な様子を面白おかしく皮肉も交えながら、そして同期生ならではの遠慮のなさや友情を込めて描かれている。当時、若き研究者であつた洵の日常の一端をうかがい知ることができる貴重な作品である。

このような文章を書いた有島への洵の友情はとても厚いものがあつたと思われる。というのは、私が祖父洵から有島の話聞いたのは、記憶する限りでは一度だけであつたが、それは私が小学生の頃に新聞であつたか、たまたま有島のことが書かれていたのを見たときだつたと思う。そのとき祖父は、有島があまりにも早くに亡くなったことをとても惜しんでいた。そしてよき友であつたことを私に話してくれた。

4. 農学研究者の道へ

洵は、1901（明治34）年7月に札幌農学校本科を卒業し、洵の生涯の恩師となる宮部金吾教授の下で植物病理学を専攻し研究者の道を歩み始めた。翌1902（明治35）年3月には札幌農学校助教授に任命された。さらに1904（明治37）年には北里柴三郎博士の伝染病研究所で学ぶ機会を得た。この



写真3 植物学教室メンバー（1908年6月）
前列左から2人目宮部金吾教授、後列左端半澤 洵
（宮部金吾旧蔵写真、北大植物園所蔵）

時に志賀 潔博士の知遇を得た。1907（明治 40）年に札幌農学校は東北帝国大学農科大学に改称した。この年に洵は、「応用菌学」の講義を開講した（写真3）。



図1 洵の著書
『雑草学』中表紙
（1910年1月）



図.2 洵の著書「雑草学」に用いた図版原図
（描画 半澤 洵）（北大文書館所蔵）

そうした中で、1911（明治44）年に宮部教授から新たな研究分野であった「応用菌学」の講座開設のためドイツ、フランスなどヨーロッパ各国へ応用菌学研究のための留学を命じられた。

洵が著書『雑草学』⁶⁾を出版したのは、留学出発の前年1910（明治43）年1月であった。この著書の中に掲載した植物の図版いわゆる植物画の大半は洵自身が描画したものである（図1、2）。

私が子供の頃に植物画や顕微鏡で見た標本の図などの原画をみた事があったが、それらは非常に細密に描かれ、多くは彩色されていて美しいと思った覚えがある。

このような経緯があったので、先に引用した有島武郎作の「同級生」にある「あれは坊ちやんが植物學に永遠の訣別をする記念の出版」といった表現が生れたのではないかと推察する。洵自身の心境をいまとなつては確かめることは出来ないが。

ちょうどその頃（1910年）に、同期生東海林氏の結婚に際して皆夫人同伴で集まり集合写真を撮っている。洵の肩に有島が、有島の肩に星野が手を添えているのがわかる。この時、洵の妻美加は3人目の子で長男の道郎（筆者の伯父）^{みちお}が生れた後で欠席している（写真4）。



写真4 東海林氏結婚ヲ期トシ同級生家族集合記念撮影（1910年）後列左から半澤、有島、星野、渡部、東海林、木幡、森、石澤、井口、森本、蠣崎 前列は各夫人左から星野、有島、井口、東海林、森本、森、蠣崎、木幡、石澤（星野勇三旧蔵写真帖、北大文書館所蔵）

そうして、いよいよ1911（明治44）年12月6日に在京の知人や志賀 潔博士らに見送られ、ドイツをはじめヨーロッパ各国への留学のため横浜港からフランスのマルセイユへ向け出航した⁷⁾。

（つづく）

参考文献・引用文献

- 1) 中浜康光(1967) 祝白石中学校開校 20 周年 札幌・白石開拓史—北海道開拓使貫属考一. 札幌市立白石中学校開校 20 周年記念事業協賛会, 1967 年 10 月再版.
- 2) 郷原康一 (2007) 半澤 洵の生涯～白石に誕生した納豆博士～. 平成 19 年度白石区特別講座 白石を学ぶⅡ 文化編, 白石区民センター運営委員会主催, 2007 年 9 月 1 日.
- 3) 札幌市白石区老人クラブ連合会編(1978) 白石歴史物語. 1978 年.
- 4) 有島武郎 (2002) 同級生. 有島武郎全集 第 15 巻, 筑摩書房, 2002 年 8 月.

- 5) Jonathan Swift (1726) Gulliver's Travels. 中野好夫訳「ガリヴァ旅行記」. 新潮文庫, 1992 年, 第 3 篇 第 5 章に, 都市「Lagado (ラガドー)」にある研究所でのガリヴァの体験談のところに以下の様な研究についての挿話がある。
“extract sunbeams out of cucumbers” (胡瓜から日光を抽出する)
- 6) 半澤 洵 (1910) 雑草學. 東京合資会社六盟館.
- 7) 半澤 洵 (1911) 「留学日記」(1911 年 12 月から記録). 北大文書館所蔵.

特別寄稿

半澤 洵先生小伝 (2) — 応用菌学講座の創設と納豆菌純粋培養法の確立 —

北海道科学大学 名誉教授 半澤 久

1. 初めての留学

祖父半澤 洵は、1911(明治 44)年 12 月 6 日に日本郵船宮崎丸で横浜港からフランスマルセイユへ向け旅立った(図 1)¹⁾。このとき洵は 32 歳、東北帝国大学農科大学(現北海道大学農学部)助教授であった。洵にとって初めての洋行であったが、その使命・目的は、東北帝国大学農科大学に応用菌学講座を創設するため、当時その分野の先進国であったドイツ、フランスそしてアメリカなど各国の優れた研究者の下で研究研鑽を積み、また研究施設・設備をつぶさに視察し情報収集することであった。この留学期間は、1914(大正 3)年 6 月までおよそ 2 年半であった。そして留学で得た成果は、洵自身のその後の研究・教育活動に大いに反映され、そして北海道大学における応用菌学研究発展の礎となり、また日本の当該分野の発展に貢献したといえるだろう。

2. マルセイユへの船上にて

横浜から神戸、門司、上海、香港、シンガポールを経由しインド洋へ向い、コロンボを経てアラビア海、紅海、スエズ運河を通過して地中海へ入りイタリア沖を経由して 1912(明治 45)年 1 月 22 日にフランスのマルセイユ港に到着した。

洵は、横浜出港から留学期間を通じて日記をつけている²⁾。日記には、その日の体調、行動記録、



図 1 洵が乗船した宮崎丸の絵葉書
(絵葉書資料館ホームページ¹⁾より)

研究のこと、友人・知人との交流、街の様子、費用支出項目・金額など細かく書いてあり、当時の各国の身近な物の値段や社会状況などを垣間見ることができ興味深い。

洵は、乗船時に顕微鏡を携帯していたので、例えば次のような記述がある(図 2)。

「12 月 15 日(金曜日) 上海解纜/午前六時頃
北緯 31° 00' 東経 122° 11'

(中略) 中食迄顕微鏡ニテ Banana ノ皮ノカビヲ見ル Pycnidia 内ニ Gloeosporium ähnlichen Conidien ノ存在セルヲ見ル之ヲ写シ書ケリ・・・」

これは、まさに応用菌学研究を担おうと意気込む洵の研究者魂の表れと思える。その後も船中で度々顕微鏡で食物のカビを観察している。

また、マルセイユまでの航海中には、よくビールを飲み、頻繁にピアノを打つ(弾くの意味である

う)などの記述がある。また、同船の日本人と「謡をやる」との記述もある。長い船旅での時間のすごし方・楽しむ方法をもっていたようである。

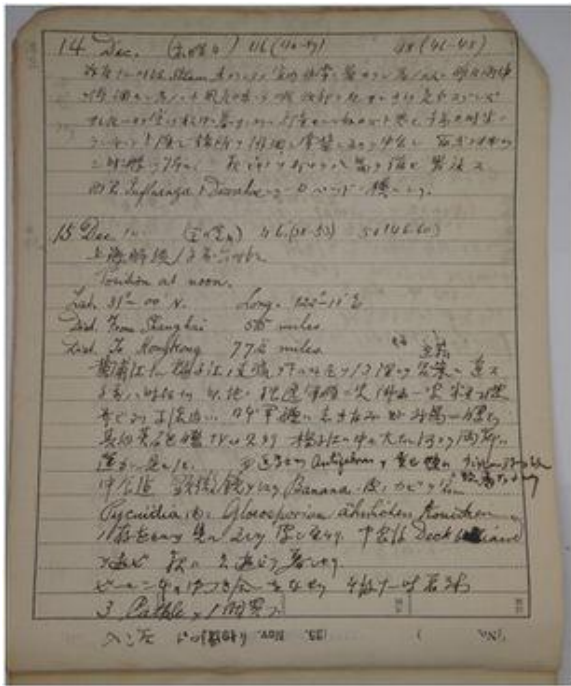


図 2 洵の「留学日記」(1911(明治 44)年 12 月 15 日 上海から香港への船中) (北大大学文書館所蔵)

3. ドイツ、フランスでの研究活動

マルセイユからヨーロッパ大陸に上陸し、鉄道でドイツ帝国のハノーバーへ向い、1912(明治 45)年 1 月 29 日に到着している。翌日から、最初の留学先であるハノーバー高等工業学校ウェーマー(Wehmer)教授の下で仕事を始めた。同教授は発酵菌類研究の第一人者である。洵は、クモノスカビなど発酵菌類の研究をおこなった。この研究は、後に洵の学位論文につながる。その頃、洵が妻美加に送った葉書は、片面が実験室での写真で、裏面に実験室の様子が細かく分りやすく記述されている(写真 1)。



写真 1 ハノーバー高等工業学校実験室での洵 (半澤直子所蔵)

続いて、1912(大正元)年 9 月からは、パリのパストゥール研究所で同研究所の最初の日本人研究者として生物化学の権威ベルトラン(Bertrand)教授の下で研究をおこなった。ここでは研究と同時に同教授の指示で化学の講義を聴講している。

次に、1913(大正 2)年 8 月からは、ドイツ・ライプツヒ大学の土壌微生物学の世界的権威レーニス(Röhnis)教授の下で研究をおこなった。

洵は、2 年半余りの留学期間中に、ドイツ、フランス、スイス、イタリア、ロシア、ポーランド、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、ベルギー、オランダ、イギリス各地の大学や研究所を訪問し、そして 1914(大正 3)年にアメリカへ渡り計 14 カ国を歴訪し、米国サンフランシスコから日本へ向い 1914(大正 3)年 6 月 18 日に帰国した。

私は、小学生の時に祖父から留学時の体験談を聞き、フランスやヨーロッパへの興味を喚起されたように思う。

4. 応用菌学講座の創設

ライプツヒ大学レーニス教授の下で研究中に、南 鷹次郎教授、宮部金吾教授、大島金太郎教授の 3 人から、「応用菌学講座の研究室を新築するから設計図を至急送れ」との指示があった。レーニス教授の協力を得て一部 2 階建ての設計案(建築と設備)を作成したが、大学側が想定した規模をはるかに超えていたので計画を縮小せざるを得なかった。設計案の変遷については、北大大学院工学院池上重康博士の論文に詳しい^{3),4)}。応用菌学講座建物の建設は、1915(大正 4)年 6 月に着工し、翌 1916(大正 5)年 3 月に竣工した。木造平屋建て延床面積約 100 坪(330 m²)である(写真 2)。



写真 2 応用菌学講座建物(1916(大正 5)年) (高尾彰一先生寄贈資料より、北大大学文書館所蔵)

当時の大学構内では、ひときわ目立つスマートな建物であったと言われている。現在の農学部建物の北西側に少し離れたポプラ並木入り口近くにあった。実験などで万が一火災が発生しても他へ類焼しないよう配慮したためであった。現在は取り壊されて残っていない。

洵は、1915(大正4)年に『「クモノスカビ」属菌の研究』で農学博士の学位を取得し、応用菌学講座担任となり、1916(大正5)年に東北帝国大学農科大学教授に任官し、1918(大正7)年の北海道帝国大学設置により北海道帝国大学教授となった。応用菌学講座の建物が完成した頃、大学構内には電気が来ておらずガスのみであった。洵は、留学時の研究経験を踏まえて、微生物の培養などには電力が必須と考え大学構内への電力導入を大学本部へ提案し交渉した。しかし、費用負担が大きい「贅沢だ」と受け入れられなかった。当時大学の正門近くまでは電力が来ていた。そこで、洵は個人で判をつき借金をして、応用菌学講座建物までの電力引き込みを実行した。引き込みに必要な電柱敷設とケーブルの費用返済は月賦払いとしたということである⁵⁾。すなわち、北海道帝国大学構内に電力を引き込んだのは、洵の応用菌学講座が最初だった。いったん引き込みが行われると、他の教室が途中から無断で便乗したという後日談もある。

洵は、応用菌学講座の担当教授となり、新しい実験室を備えた建物を得て、研究・教育に臨んだ(写真3)。

当時の日本では、新しい研究分野であった応用菌学の研究・教育を精力的に行った。

「応用菌学」の意義を、洵は手書きの教科書(講義ノート)の冒頭で以下のように記している⁷⁾。

「應用菌學ノ意義 應用菌學(Technical Mycology)ハ人生ニ密接ノ關係ヲ有スル微生物(Microbes, Microorganisms, Microscopical small living Organisms)ニ就テ研究スル學科ナリ。寧ろ微生物學(Microbiology)ト称スルヲ正當ナリトス。

微生物トハ動植両界ニ属スル微細の生物ヲ総称スルモノシテ其ノ個体ノ検査ニハ何レモ高度(又ハ弱度)ノ顯微鏡ヲ要スルモノナリ。」

応用菌学講座における洵と講座のおもな研究業績には以下のようなものがあつた⁸⁾。



写真3 応用菌学講座メンバーと洵(右から2番目)および肖像写真 (北大大学文書館所蔵)⁶⁾

(1) 土壌微生物に関する研究

遊離窒素固定菌アゾトバクターに関する研究；ライプチヒ大学レーニス教授との共同研究(1914年)

(2) 食品微生物に関する研究

果実貯蔵に関するもの、牛乳及び乳製品に関するもの、鰹節の黴に関するもの、水産缶詰や水産乾製品に関するもの、醸造品に関するもの、砂糖の微生物、食塩の微生物等々ほとんど日本において初めて着手された研究が多く、いずれも後学の指針となったといわれている。そうした中に、納豆菌と納豆製造に関する研究がある。

(3) 工業微生物に関する研究

アミロ菌に関する研究:全世界でアミロ法によるアルコール製造に際し用いられる菌で、リゾープス・デルマール (*Rhizopus delemar*) は、洵の研究によりその菌学的性質が明らかにされ、新種として命名された(1912年、ハノーバー高等工業学校ウェーマー教授の下での研究)。生理活性を有するリゾープス菌属の中にリゾープス デルマール ウェーマー エト ハンザワ (*Rhizopus delemar* Wehmer et Hanzawa) の菌名があり、ウェーマー教授と洵が命名した。「リゾープス」は和名で「クモノスカビ」である。

5. 納豆菌の純粋培養法の確立へ

創設当初の応用菌学講座は、研究資金はほとんどない状況であった⁹⁾。そのような時に、納豆製造業界から納豆菌の純粋培養法に関する相談を受けた。洵は、研究資金を得ることにつながるだろうと考え、納豆菌純粋培養による納豆製造に関する研究を始めた⁹⁾。そのいきさつについて、北大の応用菌学講座の2代目教授佐々木西二博士^{ゆうじ}の文章「縁の下の力持ち」や3代目教授高尾彰一博士の講演論文「納豆研究の歴史的考察」他から咀嚼引用する^{10),11),12)}。また、堀田国元・佐々木 博両

氏の論文を参照した¹³⁾。

糸引き納豆の菌学的研究は、1894(明治27)年 矢部規矩治博士による納豆の粘質物から4種類のバクテリアを分離したのが最初である。その後、1905(明治38)年に澤村 眞博士(東京帝国大学教授)が納豆製造の主役である納豆菌(*Bacillus natto* Sawamura)を発見し、安全かつ清潔な納豆をつくるためには、純粋培養の納豆菌を用いることを提唱した。この頃、村松舜祐博士(盛岡高等農林学校教授)のように、納豆菌の研究をしながらみずから納豆製造を実践する研究者もいた。

1912(明治45)年当時、製造販売されていた納豆は、すべて稲藁で包んだ苞納豆であった。当時の糸引き納豆の一般的な製法は、大豆を水に浸漬し、煮て十分やわらかくした後、熱いうちにその適量を藁でつくった苞の中に入れ、これを温かいところに1~2日置いて発酵させるやり方である。この方法では、藁にもともと付着している納豆菌が保温中に繁殖し、大豆の成分を分解して、納豆特有の香気と粘質物を生成するようになる。すなわち自然発酵を巧みに応用した我々の祖先のすばらしい知恵である。しかし、この方法は極めて原始的かつ非衛生的で、しかも藁には納豆菌以外の各種の雑菌が付着しているので、藁の中で常に品質のよい納豆ができるとは限らない。

この点に着目して、純粋に培養した納豆菌を用い、さらに藁苞に頼らない衛生的な容器を用いた画期的納豆製造法を完成したのが洵である。

洵は、栄養に富み消化もよく、欧米のチーズに匹敵する納豆を、非衛生的な藁と切り離して製造し、衛生的な文化的食品にすることを目指した。そのために、多くの実験を重ねた結果、ついに製造時の温度・湿度の適正条件を含む科学的製法の確立に成功した。純粋培養の納豆菌とともに、藁苞のかわりに清潔な経木や折箱を用いる「半澤式納豆製造法」が誕生した。この納豆製造法について、洵は、1918(大正7)年に「納豆菌と其使用法」として発表した。その翌年1919(大正8)年に、全国の納豆製造業者を対象に、この新しい製法を積極的に普及、指導するため「納豆容器改良会」を設立し、さらに同年12月10日に雑誌「納豆」を刊行した(図3)。この新しい納豆製造法の普及に

は、札幌の民間企業である相澤商会(相澤元次郎札幌農学校15期生、洵の姉雍の夫)が納豆菌販売と納豆製造法普及に、そして南部鐵太郎商店が納豆製造販売に大きく貢献した^{14), 15)}(図4)。

洵は、自らこの製造法を、納豆製造業者(納豆屋さん)の方々に熱心にそして根気強く直接伝授指導していた。しかし、初めのころ納豆屋さんたちはこの新しい製造技術をなかなか信じようとしなかった。そのときの洵の様子を、弟子の佐々木西二博士は、「1人1人の納豆屋さんに、手をとって噛んで含めるように、実地指導を積み重ねて行かれた。先生の人間性、克明さ、熱意、それに加える心底からの親切さは、遂に納豆屋さんの一部を動かすことが出来た。」と記している¹⁰⁾。

現在も、当時洵が直接指導した仙台の三浦二郎氏の宮城野納豆製造所(仙台市)では経木容器を使い¹⁶⁾、また三浦氏を介して洵の指導を受けた金沢賀治・みほ夫妻の浅間納豆本舗(長野県佐久市)ではパッケージに「半澤博士製法」と印刷して¹⁷⁾、それぞれ販売している(図5)。また北海道内には、経木容器での製造法を守り続けている羊蹄食品(洞爺湖町)がある¹⁸⁾。



図3 雑誌「納豆」の表紙
右：創刊第壹號、左：第二號 (半澤 久所蔵)



図4 納豆菌、納豆製造法、納豆販売に関する相澤商会¹⁴⁾と南部鐵太郎商店の広告¹⁵⁾



図5 左：宮城野納豆製造所の経木容器とパッケージ¹⁶⁾
右：浅間納豆本舗のパッケージ¹⁷⁾



図6 家庭用応用菌学ポケットブック1『納豆と納豆菌』、
北海道大応用菌学教室編（当時の教授は佐々木
西二博士）、1948（昭和23）年、北方出版社
（半澤 久所蔵）

こうした納豆製造業者の方々と接していた洵は、札幌農学校予科生の時の恩師新渡戸稲造博士の「学問を基礎にして世のために役立つ実学を」との教えを真摯に実践していたのだと思う。

北海道帝国大学の応用菌学講座は、納豆菌の純粋培養法の確立で全国的にその知名度をあげた。また洵は、札幌や北海道では「納豆博士」と親しみを持って呼ばれるようになった。1948(昭和23)年には、家庭で納豆をつくる方法も紹介したポケットブック「納豆と納豆菌」を応用菌学教室編で発行した(図6)。洵は、1941(昭和16)年に北海道帝国大学を停年退官したが、それまで築いてきた応用菌学の研究・教育の発展と拡充への取り組みは、その後を担った歴代の教授とスタッフそして学生達に確実に引き継がれていった。

今日、納豆が人々の日常食品として広く全国に普及していることは、洵が目指した「優れた栄養食品である納豆の衛生的製造法が広く普及し、より多くの人々に食べてもらう」ということが、まさに実現している。洵が常に心がけていた「世のため、人のため、社会への貢献」の具体的な成功例と言えるのではないだろうか。(つづく)

参考文献・引用文献

- 1) 絵葉書資料館ホームページ、
https://www.ehagaki.org/shopping/ja-a3/ja-a3_a1/ja-a3_a1_a6/ja-a3_a1_a6_a2/18692/
- 2) 半澤 洵；留学日記（直筆） 北大大学文書館所蔵
- 3) 池上重康；農学士半澤洵の欧州巡行と東北帝国大学農科大学応用菌学教室、日本建築学会大会学術講演梗概集、2013年8月
- 4) 半澤 洵；留学報告書（直筆） 北大大学文書館所蔵
- 5) 佐々木西二；「故半澤 洵先生」 舎密 10号(1973(昭和48)年2月)
- 6) いいね!Hokudai ホームページ #85 菌は異なるもの味なもの(2)～応用菌学研究室の現在・過去・未来～より転載
- 7) 半澤 洵；「応用菌学」教科書（自筆ノート）、北大大学文書館所蔵
- 8) 北海道大学応用菌学教室編；応用菌学 半澤博士古稀記念号、第三巻 第一号、昭和23年11月
- 9) 北海道朝日新聞 1970(昭和45)年11月14日
- 10) 佐々木西二；縁の下の力持ち、温故知新、株式会社秋田今野商店、1972 No.9
- 11) 高尾彰一；納豆研究の歴史的考察、アジア無塩発酵大豆会議講演集、1985年7月、筑波
- 12) 高尾彰一；納豆と納豆菌－応用菌学の視点から－、大豆月報第135号、1986年9月
- 13) 堀田国元・佐々木博；近代納豆の幕開けと応用菌学、化学と生物、49(1)、日本農芸化学会、2011年1月
- 14) Seesaawiki ホームページ 相澤商会
<https://seesaawiki.jp/w/taiji141/d/%C1%EA%DF%B7%E%A6%B2%F1>
- 15) A-HITbio ホームページ
<http://www.a-hitbio.com/product/natto2.html>
- 16) 宮城野納豆製造所ホームページ
<https://www.miyagino-nattou.com/webcart/view.php>
- 17) 浅間納豆ホームページ、<http://shopstyle.jp/asama/>
- 18) 時を訪ねて「納豆の製造革命 北大農学部(札幌)」、北海道新聞、2019年3月17日 日曜版

半澤 洵先生小伝 (3) ー社会事業への情熱ー

北海道科学大学 名誉教授 半澤 久

1. 社会への目、人のため

祖父半澤 洵は、1892年(明治25)年に13歳で札幌農学校予科に入学した。そこで生涯の恩師と呼べる二人の教授との出会いがあった。ひとりには洵の学問研究での恩師宮部金吾博士、そして洵の人格形成に大きな影響を与えた恩師新渡戸稲造博士、両博士は札幌農学校予科2期の同期生である。

本稿では、洵が十代前半で敬愛する新渡戸博士から受けた教え「世のため、人のため」を生涯抱き続け、それを実践した社会事業を紹介する。第一は新渡戸博士が創立した「札幌遠友夜学校」(以下、遠友夜学校)、第二は児童生徒の養護支援教育・訓練施設の先駆け「柏葉荘」、そして第三は官公庁や公立学校退職者の生活改善への活動である。

2. 「札幌遠友夜学校」とともに50年

私が小学生の頃、祖父洵が書類や資料の整理をしながら聞かせてくれた話の中で思い出すのは「新渡戸先生」と「遠友夜学校」である。当時の私はどちらも知らないことであったが、祖父は親しみを込めた口調で度々「新渡戸先生」と言っていたのをよく憶えている。いま思えば、これは洵が新渡戸博士と遠友夜学校のことを非常に大切にしていた思いが詰まったことと今は理解できる。

遠友夜学校は、1894(明治27)年6月に新渡戸博士により創立され(現在の札幌市中央区南4東4丁目)、2019(令和元)年6月は開校125周年に当たる¹⁾。この夜学校は、学びたくても学校へ行けない人や昼間働いている人が学べる、学費はなし、男女共学、先生は生徒の友達、など当時の時代・社会背景では全く例のない先進的かつ慈愛に満ちたものであった。創立時、洵は札幌農学校予科生で15歳であった。新渡戸博士の尊い理念に基づく遠友夜学校の教師ボランティア募集に応じた。その後、予科5年から編入してきた有島武郎ら同期生と遠友夜学校の教師を務めた(写真1)。

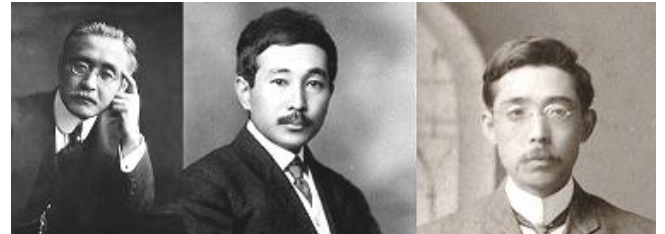


写真1 左から新渡戸稲造、有島武郎、半澤 洵

洵は遠友夜学校を閉校する1944(昭和19)年まで50年間にわたり新渡戸博士の教育理念と目的を守り続け、その運営・維持・発展に努めた。

洵が著した『新渡戸博士と遠友夜学校』²⁾ならびに北大大学文書館リーフレット『遠友夜学校の歴史』³⁾をもとに遠友夜学校の時代推移を表1に示す。洵は50年の間で、1921(大正10)年には初代の宮部金吾博士から数えて7代目の遠友夜学校代表となった。さらに1939(昭和14)年からは新渡戸萬里子夫人の後を継いで校長に就任し、閉校まで努めた。

なお、遠友夜学校に関する文献等は多数あるが、本稿では、おもに『遠友夜学校』(さっぽろ文庫18)⁴⁾を参照・引用した。なお、中川厚雄氏の著作『札幌遠友夜学校研究』I~V⁵⁾は、生徒と教師についての詳細なデータや直接取材した記録を見ることが出来る大変貴重な研究資料である。

遠友夜学校は、新渡戸萬里子夫人が米国の縁者から受取った遺産全額を創立資金にあて開校した。その後、この事業に賛同する篤志家、札幌農学校後に北海道帝国大学の学生・教員からの継続的な維持会費、企業・団体からの臨時寄附金、さらに1911(明治44)年からは公的補助金(宮内省、厚生省、北海道庁、札幌市役所ほか)などの収入も得て維持・運営されていた(表1)。1923(大正12)年に遠友夜学校は財団法人の認可を受けた(表1)。遠友夜学校への支援は、資金のみならず運動会など行事のために商店主や企業から学用品や日用品などの寄附提供もあった(写真2)⁶⁾。

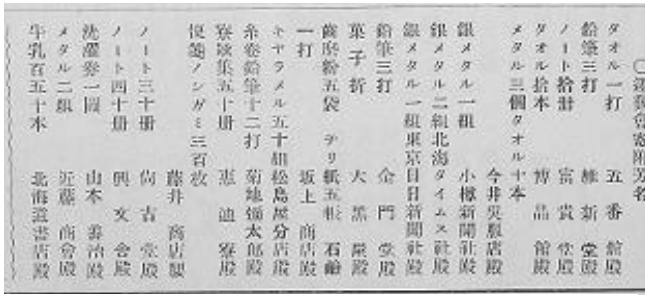


写真2 運動會寄附者芳名
遠友（札幌遠友夜学校学期報）第19号、1936年
8月発行⁶⁾より（北大大学文書館所蔵）

表1 札幌遠友夜学校の開校から充実期までの推移

年代	札幌遠友夜学校の推移
1894年 (明治27)	札幌独立教会附属日曜学校（札幌農学校生徒等で経営）の敷地及び校舎を買い取り、夜学校（2教室）を開設。「札幌遠友夜学校」と命名。
	リンコルン会：新渡戸先生がエイブラハム・リンカーンの人となりを愛したことに生徒が感激して、リンカーンの言動を習うことを旨として生まれた。
	当時、ようやく社会事業なるものの重要性が認識されるようになった時期であったが、その実行はきわめて微々たるもの。
1897年 (明治30)	篤志家の寄附で、24坪（約79㎡）の校舎（4教室）となる。尋常科と高等科の2科に分ける。
1900 (明治33)	小学校令に準じて授業を行うことができるようになる。
1909年 (明治42)	新渡戸先生来道を迎えるに当たって、校舎増改築が発議され、600円（現在価値で約450万円）の寄附を得て、旧校舎の大修繕と増築を行い、4教室・事務室・当直室で延べ74坪（約244㎡）、120人の生徒収容が可能になる。尋常科を各2学年に3教室、高等科を1教室にする。1教室に2名の教師が担任。
1911年 (明治44)	この年より、内務省並びに北海道庁より、補助金、奨励金等を受ける。
1916年 (大正5)	私立学校の認可を受ける。
1920年 (大正9)	校舎の腐朽が甚だしくなり、寄附金を募り、3千円（現在価値で約2,300万円）を得て改築に着手。教室10・当直室・その他で延160坪（約528㎡）。収容人員250名可能となる。男女共学単級制とする。かつ時勢の要求に応じて、高等科に準ずるものを廃し、4年生の中等部を併設し、中学校及び女学校の初年程度を学習させる。
1923年 (大正12)	組織を法人とし、事業の永續と発展とを期すこととなり、新渡戸先生は夜学校の財産をすべて寄附したので、5月に財団法人札幌遠友夜学校を設立。
1929年 (昭和4)	札幌市より小学校の旧校舎の払い下げを受け、教室10・屋内運動場・職員室・当直室、図書館等を有する木造亜鉛張鉄板葺き2階建てとなり、500名以上収容可能となる。
1936年 (昭和11)	敷地面積521坪（約1,719㎡）、建築面積187.5坪（約619㎡）、延床面積332.25坪（約1,096㎡）の規模となる。

遠友夜学校では、教室での勉強だけでなくスポーツや遠足・海水浴なども行っていた。また、学芸会もあった。写真3は、有島武郎が札幌農学校

教員時代に学芸会の劇を指導し上演した様子である。これは、へき地教育研究に長年取組まれた高柳 晃先生が所蔵されていたもので、そこには遠友夜学校生徒であった同先生のお母様が写っている。新渡戸博士は、1897(明治30)年に札幌を離れた後1909(明治42)年と1931(昭和6)年に2度来校している(写真4)。2度目で最後となった遠友夜学校



写真3 有島武郎が指導した劇を学芸会で上演（大正初期）
写真右端の少女が高柳先生のお母様
（高柳 晃先生所蔵）

訪問時に講話をし、その中で洵のことも言及している。以下にその一部を引用する⁷⁾。(太字は著者)
「此の學校を始めるに當り先生を頼んだ。學問の出来る人のみを頼んだのではない友達になれる一遠友になれる人、子供を可愛がる人、畢竟人と会って明るい気持ちで親切にして呉れる人を頼んだ。だから遠友夜學校に来て居た人は立身する。
萬事私に代って代表をして下さった人は何んと偉い人ではありませんか、近頃は専ら半澤先生が色々な事をして下さる。教育は物を覚えることよりも立派な人だとされる方が後々の成功も確かだ。
(中略) 又寄附をせられる方々も額の如何を問はず使ひ道がある可金を出す世の中は美しい。自分一個の為のみでは世の中は存在しない。人の為と思へばこそ嬉しい、故に此の學校の関係者の心も考へ親達の意を考へ、即ち遠友の意を考へ、若い中にも學校の内でも自分の出来る事なら人の為にする、學校を出てからも、尚如何にせば世の為人の為になるかを考へ、何事によらず人の心の表われだから、學校の歴史、先生のなさる事又學校を

助けてくれる人や学校の名に背かぬ様互に心掛け、唯に本を読み算術をするのが学校の仕事と思はず、**人格を養成し明るい気分の人を養ふ事が目的である**」と全生徒を前にして語りかけた。

この時、新渡戸博士は、写真5の揮毫をした。ひとつは新渡戸博士が尊敬するリンカーン大統領二期目の就任演説の一節 “With malice toward none, With charity for all” を英文で書いた。



写真4 新渡戸博士来校記念 (1931(昭和6)年)
2列目左から4人目宮部金吾博士、新渡戸稲造博士、半澤 洵(52歳)、平塚直治提供 (北大大学文書館所蔵)



写真6 遠友夜学校講堂の新渡戸博士の揮毫扁額
1932(昭和7)年3月卒業式、前列左から5人目洵(53歳) (北大大学文書館所蔵)

「博士の本校設立の精神を体し是が具現に努めて来たが、教師として集った学生は何れも博士の徳風を慕ひ、博士の精神に共鳴しその事業の一部に参加する光栄と喜びとを感ずる者のみで、何等の報酬なきにかかはらず多忙なる勉学の傍ら熱心、その授業に、その経営に当って倦まず、その中に又自らの人格を棟やし^{ただ}菅に教へるのみならず、自らも教へられて、各方面に散り、本校にて養ひ得た精神の發揮に努めて居る。(中略)

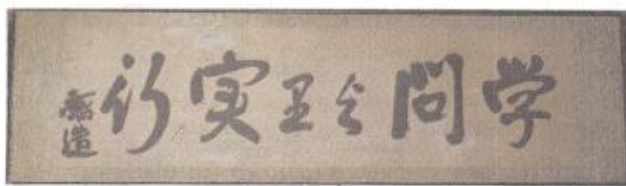
前述の様な本校の事業の発展は勿論、(中略)其の趣旨に賛して之が維持発達に努力した多くの人々の力に負ふ所が多いのであるが、その創立者であり又校長として一生此に力を致された博士の人格のあるに非ざれば到底今日の結果を望み得なかつたであらう。実に本校は博士の精神の具現であった。(中略)其は博士が今日札幌に残された唯一の事業であり、その形は非常に小さいものではあるが、其が博士の理想の一部であり、その人格の具体化である事を憶って、私等幸ひこの事業の一部を担当する事を許されたものは、その創立の精神の貫徹に微力を致したいと願って居る。」

このように、洵は、遠友夜学校の事業を通じてあくまでも新渡戸博士の「人間教育の理想の実現」に努め続け、その維持・発展に努めていたことがわかる。

遠友夜学校は、新渡戸博士が他界した8年後大東亜戦争最中の1944(昭和19)年に閉校となった。その後、遠友夜学校の跡地は児童公園となり、そこには洵の他界後1974(昭和49)年に新渡戸博士夫妻顕彰碑が建てられた。その除幕式には、洵とともに遠友夜学校運営に尽力し閉校措置にも対処



「何人にも悪意をもたず、凡ての人に愛をもって」
1865年3月4日リンカーン大統領の2期目の就任演説の一節



學問より実行

写真5 新渡戸稲造揮毫の扁額(2度目の来校時)
上段：北大大学文書館所蔵、下段：『遠友夜学校』(さっぽろ文庫18)⁴⁾より

また「學問より實行」の揮毫は、講堂に掲げられいつも生徒たちが見ることが出来た(写真6)。

新渡戸博士は、この来校の2年後1933(昭和8)年10月にカナダのブリティッシュコロンビア州都ビクトリアで客死した。洵は、新渡戸博士追悼集に「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」と題し寄稿。(太字は、筆者)



写真7 新渡戸博士夫妻顕彰碑の除幕式
1974(昭和54)年11月23日

した高倉新一郎博士をはじめ洵の長男道郎^{みちお}やひ孫(道郎の孫)齋藤絵奈などが参列した(写真7)。新渡戸博士を深く敬愛した洵が「博士が今日札幌に残された唯一の事業である」と記した遠友夜学校の業績が、札幌の人々の誇りとなり、将来世代に継承されることを私は洵の孫としてまた札幌に住む者として願っている。

3. 養護児童施設「柏葉荘」

洵は、北海道帝国大学を定年退職後、昭和20年代以降も社会事業にかかわりを持ち続けた。そのひとつが北海道共同募金会である。洵は、1951(昭和26)年から1959(昭和34)年まで会長を務めた⁸⁾。その頃の共同募金運動に関するエピソードを、洵の隣人でもある高倉新一郎博士が次のように記している⁹⁾。

「共同募金運動の初期には、税務署使用済の印紙に対し、額面二～五%を戻してくれるというので、東奔西走して貼った書類を借りて、丁寧にはがして、遂に十万余円を得、これを社会事業に役立てられたことなどは、先生の面目を躍如としてみるができるだろう。」

この募金活動において、洵が草の根的な方法に徹して人々からの浄財を得ようとしたことの表れであったように思える。

このようにして得た共同募金が活用され設立された施設のひとつに「柏葉荘」^{はくようそう}がある。柏葉荘は、その沿革によると、1957(昭和32)年12月に養護児童アフターケア施設(青少年育成施設)の設立が起案され、北海道共同募金会から北海道知事に申請された¹⁰⁾。この施設設立のため、翌1958(昭和

33)年8月に財団法人北海道青少年育成施設設立準備会が発足し、洵はその初代理事長となった。洵が北海道共同募金会会長の任にあるときであった。同年12月に柏葉荘の建物が竣工した。翌1959(昭和34)年3月に児童福祉法による養護施設として認可され、同年4月から札幌市立白石小中学校柏葉荘分校として認可された。

社会福祉法人柏葉荘設立趣意書¹¹⁾には、「殊に養護施設、その他の社会福祉施設に収容中の者で、義務教育課程を修了しても尚社会に進出する機会に恵まれず、特に技術習得或いは向学心を阻まれ余儀なく無為徒食の日を過ごす者等多数ある現状は、国家的にも一大損失である。従ってこれらの青少年の社会進出を積極的に援助すると共に、彼等と社会との接触を密にして自活に必要な教養と技術を授ける社会福祉施設が現下絶対不可欠で、関係方面も待望していた処である。」と記されている。さらに「この施設に収容すべきは全道養護施設その他の児童関係施設に収容中の年長児を対象として、社会的教養と職業的訓練を授け彼等が速かに正当な社会生活に入り得るよう、援護育成する目的をもって設立し、その必要性に応えんとするものである。」と記されている。

柏葉荘は、当時の時代の要請に応え、養護施設から巣立つ青少年のための社会教育と職業訓練を行う施設として事業が開始され、洵はその立ち上げと初期の運営に携わった。現在は、「児童養護施設柏葉荘」として社会福祉法人扶桑苑(理事長小川敏雄氏)のもとで継続的に運営されている。

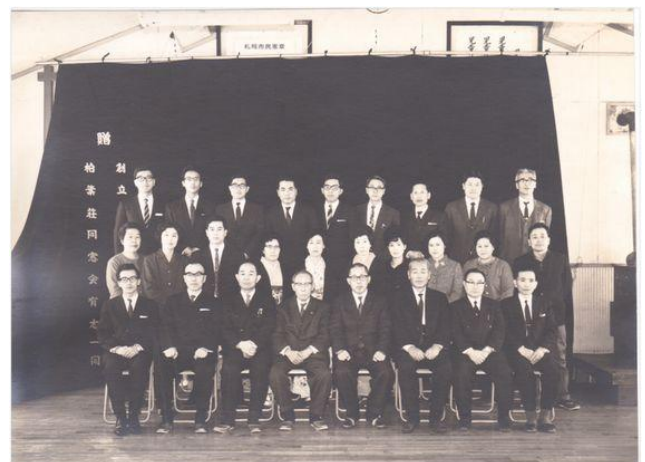


写真8 柏葉荘にて 1965(昭和40)年頃
後部の幕には贈 柏葉荘同窓会一同と記されている。前列左から4人目が洵(80歳代半ば)(半澤 洵所蔵)

4. 北海道退職公務員連盟

洵には、もうひとつ長年関与した社会的活動がある。それは昭和20年代以降の退職公務員すなわち恩給受給者の生活安定化とその向上活動である。洵自身も北海道帝国大学を定年退職した恩給受給者であった。昭和20年代当時の恩給額は、多くの受給者にとって、定年後の安定した生活を維持するには十分とはいえず、増額の要求が強かった。そこで、公務員の退職後の恩給増額を求めるための運動がおこり、1947(昭和22)年6月北海道恩給増額促進会が結成され、翌1948(昭和23)年7月には北海道恩給受給者連盟と改称、さらに1951(昭和26)年2月北海道退職公務員連盟(略称 退公連)と改称し、現在に至っている。洵は1947年(昭和26)年にその初代会長に就任し、1972(昭和47)年9月に他界するまで務めた¹²⁾。この団体では、退職後の公務員など(発足当時は官公庁、国公立学校、国鉄など三公社五現業を含んでいた)の生活安定を目指し、年金制度改善に取り組んだ。

洵は、これまで記したさまざまな社会事業への貢献も評価されて、1969(昭和44)年には第1回北海道開発功労賞表彰を受けた。これは、洵が新渡戸博士からの教え「世のため、人のため」を実践し続けたことが高く評価された証と思う。

そして、それを支えた洵の妻美加^{みか}を筆頭にした家族・親族の協力もはずすことはできない。
(つづく)

引用文献

- 1) 藤田正一(2019) 遠友夜学校創設125周年によせて. 北海道大学総合博物館ボランティアニュース No. 54.
- 2) 半澤 洵(1936) 新渡戸博士と札幌遠友夜学校. 新渡戸博追悼集, 故新渡戸博士記念事業実行委員会. さっぽろ文庫18『友夜学校』に転載.
- 3) 遠友夜学校の歴史(2019) 北海道大学大学文書館リーフレット.
- 4) 札幌市教育委員会編(1981) 遠友夜学校. さっぽろ文庫18.
- 5) 中川厚雄(2010-2019) 札幌遠友夜学校研究, I~V. 2010年12月~2019年4月.
- 6) 遠友(札幌遠友夜学校学期)19号, 1936年8月発行, 北大大学文書館所蔵.
- 7) 新渡戸稲造(1931) 學問より實行—新渡戸校長のお話1931(昭和6)年5月18日御来校. 遠友(札幌遠友夜学校学期報)9号. 1931年11月発行, 北海道大学大学文書館所蔵.
- 8) 北海道共同募金会50年史編纂委員会編(1998) 赤い羽根北海道の50年. 社会福祉法人北海道共同募金会.
- 9) 高倉新一郎(1978) 隣人としての半沢先生. 『白石歴史ものがたり』, 札幌市白石区老人クラブ連合会編集委員会.
- 10) 社会福祉法人扶桑苑 法人案内, 2019年10月.
- 11) 社会福祉法人柏葉荘設立趣意書. 1959年3月25日, 社会福祉法人扶桑苑所蔵.
- 12) 社団法人北海道退職公務員連盟編(1997) 五十年の歩み 連帯の日々を刻む. 北海道退職公務員連盟50周年記念.

特別寄稿

半澤 洵先生小伝(4) —妻美加そして家族・親族への思い—

北海道科学大学 名誉教授 半澤 久

1. 妻美加と家族

これまで述べてきた祖父洵が敬愛する恩師新渡戸稲造博士の言葉「世のため人のため」を心に刻み実践できたのは、洵の家族や親類縁者の支えがあったからと思う。今回は、洵とその家族・親族のことをファミリーヒストリーとして記す。

祖父洵は、1906(明治39)年に27歳で2歳年下の平沼美加と結婚した(写真1)。美加は、今風に言うと理系女子であった。1899(明治32)年に女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)に理科生と

して入学した。



写真1 洵と美加の
婚礼時
(1906(明治39年)
(半澤 洵所蔵)



写真2 女子高等師範学校時代の実験の様子
左側が美加、1900(明治33)年頃
(筆者所蔵)

写真2は、在学中の理科実験の様子である。当時、既に理系教師養成のための教育が、女子に対してしっかり行われていたことが窺える。

美加は、教員免許を取得し同校を1903(明治36)年に卒業し、群馬県女子高等師範学校(現群馬大学)の数学教師となった。同師範学校で2年勤務した後、1905(明治38)年に北海道庁立高等女学校(現札幌北高校)に採用された。そして洵と結婚後も1914(大正3)年まで同高等女学校で教師を続けた。

洵と美加には、女子3人、男子3人の計6人の子供がいる(写真3)。誕生順に、長女徳、二女孝、長男道郎、二男啓二、三女慶、三男宏(筆者の父)である。美加は、仕事と子育てを両立させ、三女慶が生まれる前年1914(大正3)年まで教師として勤めた。長女徳は、日本女子大学(現日本女子大学)を卒業し、鉱山工学が専門で北大工学部教授となる宮城県出身の松野栄治と結婚した。



写真3 洵・美加と子供たち、1919(大正8)年
後列右端 洵、前列左から長女徳、美加と三男宏、二女孝、洵の父時中、長男道郎と慶、洵の母加代、二男啓二 (筆者所蔵)

二女孝は、姉と同じく日本女子大学を卒業し、厚生省医官の鈴木 繁^{しげる}と結婚した。繁は、東大医学部で博士号を取得後、厚生省研究所に在職中の1942(昭和17)年に応召し軍医として満州へ赴いた。終戦時、夫繁はシベリアに抑留され、孝と3人の子供たちは満州で難民収容所に収容された。その一年後1946(昭和21)年、孝は病身であったが子供たちと日本へ引き揚げることができ、一時札幌の実家に身を寄せて療養した。夫繁は、その翌年1947(昭和22)年にシベリアから東京へ帰還でき、孝と子供たちは東京へ戻り家族が揃った。そのような体験をした娘のことを気遣ってか、洵は東京の孝の家をよく訪れていたと、私は孝の長男 甫^{はじめ}から聞いた。

三女慶は有機化学が専門で北大理学部教授となる入江 遠^{とよし}と結婚した。遠は、松下村塾で松陰門下四天王と呼ばれたひとり入江九一(他は高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿)の孫にあたる¹⁾。

長男道郎は北大理学部化学科を卒業した後、北大農学部林産製造学講座教授となった。道郎は、馬を愛し馬術に親しみ、永年北大馬術部の部長として多くの優秀な学生騎手を育て、日本の学生馬術の振興発展に尽くした²⁾。道郎は、大島直子と結婚した。直子は、大島金太郎博士の三女である。大島博士は、洵にとって札幌農学校の先輩であり教師であり、また「札幌遠友夜学校」の2代目代表も務め、台北帝国大学農学部長として台湾の農業振興に大きな貢献をしたひとである。

二男啓二は北大農学部農芸化学科を卒業し、雪印乳業株式会社に入社し、後年同社の技術担当常務取締役となった。啓二は、デンマークやニュージーランドなど当時の酪農先進国を視察し、日本の酪農業や乳製品製造技術向上に貢献している。

三男宏は北大工学部機械工学科を1941(昭和16)年に繰り上げ卒業し陸軍での兵役を経て、戦後北大工学部機械工学科教員となり教授となった。その後、苫小牧工業高等専門校長、長岡技術科学大学副学長を歴任した。宏は、永井早苗と結婚した。早苗の父は、北大医学部小児科の初代教授永井一夫である。



写真4 洵・美加の子供たち、1970年代後半
左から二女孝、長女徳、三女慶、三男宏、
長男道郎、二男啓二（半澤道郎所蔵）

このように、洵の三人の娘はそれぞれ理系・医学学問領域で仕事をする夫を持ち、三人の息子は理系分野の大学教授や技術者となった(写真4)。

洵の孫の代までで応用菌学の分野の研究を継承した者はいないが、農芸化学を学び食品や農業関連分野で仕事をしているのは、雪印乳業株式会社に勤めた洵の二男啓二と、農薬とバイオテック企業のホクサン株式会社に在職している孫卓(洵の三男宏の二男、筆者の弟)の二人である。

洵には、姉が一人、妹が三人いる。姉の雍は、札幌農学校で洵の先輩である相澤元次郎と結婚した。相澤は、「相澤商會」を立ち上げ「純粋培養納豆菌」の販売を担当した。雍には四男三女7人の子供がいて、長女満壽は東京音楽学校(現東京芸大)で学び声楽家となり、「時計台の鐘」の作詞作曲者でバイオリニストの高階哲夫が最初の夫であった(写真5)。現在時計台では、村井満壽が歌う「時計台の鐘」が流れている。



写真5 時計台の鐘(1922(大正11)年)の作詞・作曲者高階哲夫とピアノは妻満壽(洵の姪)
(札幌市時計台1階展示写真を筆者撮影)

洵のすぐ下の妹澄は、医師早川千代松と結婚し北海道秩父別に住んだ。早川は早川珍竹林の号をもつ文人でもあり、洵が編纂した雑誌『納豆』に「納豆名家句集」などを寄稿している。その下の妹律は、札幌農学校で洵の後輩で後に北海道大学農学部教授となる秋野豊太と結婚した。末妹深雪は、洵の妻美加の実家平沼姓を継ぎ平沼深雪となった。深雪は私立女子美術学校(現女子美術大学)で日本画を学び、卒業後北海道庁立札幌高等女学校の図画教師となった³⁾。深雪の作品が現在道立近代美術館に一点収蔵されている。また、深雪は「北海道美術協会」(現道展)の創立会員の一人でもあった。

2. 通称「博士村」と村会

洵の家は、札幌市桑園地区で北大植物園からも比較的近いところである(写真6)。図1は洵の家の周辺の住宅配置図である。図中の居住者名は、1940年頃の人々である。図のように、洵の家の向いは洵と札幌農学校同期の星野勇三博士宅、その東隣は高岡熊雄博士宅、同西隣は時任一彦博士宅、洵の家の西隣は高倉新一郎博士宅である。また、ごく近くには洵の学問上の恩師宮部金吾博士宅があった⁴⁾。このように、北大教授達が隣り合って住むこの街区をいつしか人々は「博士村」と呼ぶようになった。私が子供の頃、祖父洵、祖母美加が住むこの「博士村」の家で、大叔母の深雪、伯父道郎の家族5人、私の父宏と母と弟妹合わせて6人の合計14人が一つ屋根の下で暮らしていた。私は、特に大叔母の深雪に行儀などを厳しく躾けられた記憶がある。

この「博士村」では「村会」と名付けた懇親会が1912(大正元)年から始まり1965(昭和40)年までほぼ月に1度各家持ち回りで開催していた。通常は男性だけの会であるが、何か節目の会では夫人同伴で開かれた(写真7)。村会是一种の文化サロンのようなものであった。村会は、毎回当番がその日の話題などを1ページに記した「村會日誌」が残っている(写真8)。なお、この「村會日誌」については池上重康氏の詳細な報文がある⁴⁾。

祖父洵がこの村会の当番のときは、祖母美加の陣頭指揮で伯母の直子と私の母早苗がとても忙し



写真6 半澤 洵宅(年代不明)
通称「博士村(桑園)」(筆者所蔵)



写真7 博士村「村会」メンバーたち 1940年代
後列左から星野勇三、高岡熊雄、時任一彦、
宮脇 富、新島善直、半澤 洵、高倉新一郎、
前列左から3人目半澤美加(筆者所蔵)



図1 桑園「博士村」配置図⁴⁾
(上下左右の縮率は筆者が変更)

く晚餐の支度をしていた。私と弟妹と従姉たちは、晚餐のお相伴ができ楽しく興奮してその晩を過ごした。村会は、私たちが応接間と呼んでいた洋室で行われていた。私は、会の様子を直接見ることはなかったが、ドアの向こうの応接間から洵が得意の話を披露しているのが聞こえてきたこともあり、なんとも楽しげな雰囲気であった。



写真8「村會日誌」の表紙
(北大大学
文書館所蔵)

3. 仙台学寮と人の縁

洵は、自身のルーツで洵の祖父と父母が生まれ育った宮城県を常に心に留めていた。宮城県との絆を大切にしたいという思いから発案し具体的に実現した事業が「仙台学寮」の設立と運営であった。この寮は、宮城県出身の北大生のための寄宿寮である。この「仙台学寮」の設立からその後の経緯に関しては、杉野目 浩博士の報文「財団法人仙台学寮関係資料」の中の〈解題〉に詳細が記されている⁵⁾。以下にそのごく一部を引用する。

「学生会館建設は、1923(大正 12)年 5 月、貞山公(伊達正宗公)祭典に於いて、半澤 洵、平塚直治(洵と同じ札幌白石村出身で札幌農学校の先輩第 14 期生、帝国製麻株式会社取締役札幌支店長)、佐々木啓七(北海道庁地方統計主事)の三氏によって発議された。洵が建設委員長となり、建設資金の募金行脚を始めたが、同年 9 月 1 日の関東大震災に引き続く不況の中で苦労が多いものであった。一中略—それでも旧仙台藩、宮城県関係者有志の非常な努力により、関係者から募った寄附金で建設された。寮竣工は 1925(大正 14)年 11 月 29 日であった(写真 9)。建物は、木造 2 階建、延床面積 160.54 坪(約 530 m²)、竣工 1 年後に蒸気暖房設備導入、建設費は当時の金額でおよそ 3 万円である。」

1925(大正 14)年の寮竣工時の初代寮委員長(寮長)は、松川五郎氏(以降松川氏と記す)である。松川氏は宮城県出身で、父は日露戦争で満州軍作戦参謀の松川敏胤陸軍大将である。彼は北大山岳部で登山やスキーで様々な実績を残している⁶⁾。



写真9 仙台学寮
 竣工時：1925(大正14)年11月
 所在地：現在の札幌市中央区北7条西12丁目
 命名者：高橋是清(仙台藩ゆかりの元内閣総理大臣)
 設計：田中豊太郎
 施工：伊藤組(伊藤亀太郎)



写真10 仙台学寮初代寮委員長 松川五郎氏と
 その子供らと 1941(昭和16)年頃

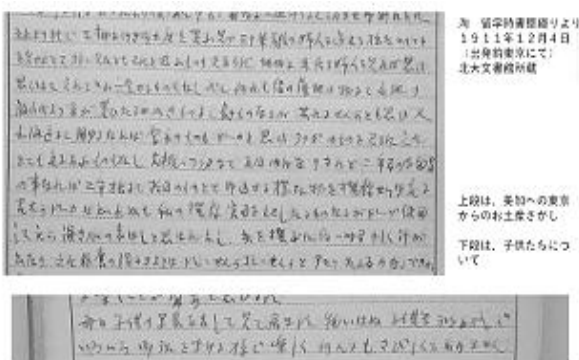


図2 洵から妻美加への手紙、1911(明治44)年
 (北大学文書館所蔵)

松川氏は、北大卒業後も洵の家を度々訪れている。写真10は、1941(昭和16)年頃、松川氏が子供を連れて洵を訪れた時のひとコマである。この時は、洵の父時中(写真後列右端)が健在であった。この写真の中で洵の右隣りは松川氏の長女貞子である。実は彼女は、後に私の母の実兄永井龍夫の

妻となった。これも仙台学寮と洵が取り持った縁かもしれない。

私が小学生のころ昭和30年代においても、洵と仙台学寮の寮生との交流はよく行われていたと記憶している。寮と洵の住まいが近かったので行き来が容易であったためとも思う。

4. おわりに

これまで記した洵の妻美加、そして子供たち、姉妹達そしてそれぞれのパートナー達が皆、洵が学問分野や近代納豆製造法普及で、あるいは社会事業で活動していた時に、共同で事業に参画したり、援助をしたり、支援をしたりしていた。

結びに、祖父洵が妻美加や子供たちのことを愛し大切にしていたことを示すひとつの手紙と、私の記憶にある思い出を紹介する。

手紙は、洵が初めてヨーロッパへ留学に旅立つ直前に東京から妻美加へ送ったものである(図2)。そこには、洵が留守の2年間美加に使ってもらうため「エリマキ」を三越で買おうとして一生懸命に品物を吟味し、寒い北海道に最適のラクダのエリマキを買ったこと、そしてそれを、「実用を旨としたるものなるがドーズ使用して我が温き心の表わしと思われたし」と綴られている。また、子供たちと離れているけれど、「毎日写真を出して見て居ました物はぬ子供たちから・いろいろ御話をきける様で楽しく何にもさびしくありません」とも書いているのである。そしてもうひとつ私が印象深く記憶していることがある。それは、昭和30年代にテレビが各家庭に普及し始めた頃、わたし達の家にも「テレビが欲しい」と当時祖父母と同居していた孫たちは強く望んでいたが、祖父は賛成しなかった。その理由は、その頃妻美加が白内障で視力が衰えていてテレビを見ることができないと洵が察していたからである。

祖父はこのように妻美加を常にいたわり、1959(昭和34)年に美加が他界した後も終生その思いを持ち続けていた。祖父が、折に触れ私に語っていたのは、「おばあちゃん(妻美加のこと)のことをきちんと記録に残しておきたい」ということであつた。実際には果たせずであつたが、その準備はしていたようである。



写真 11 洵が米寿のとき
1967(昭和 42)年
(筆者所蔵)

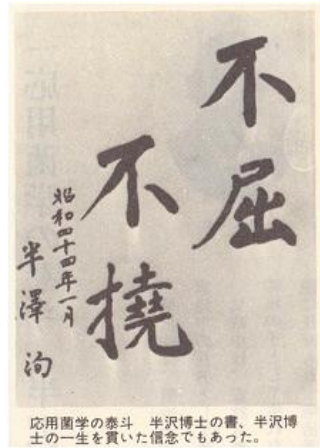


図 3 洵の書「不屈不撓」

私は、小学生の頃から祖父洵が自身の仕事の資料などを整理しているそばで過ごすことが多かった。その時祖父は、私に新渡戸稲造博士を「新渡戸先生」、宮部金吾博士を「宮部先生」と呼び、そして札幌農学校同期の有島武郎氏のことなどを優しい口調で懐かしそうに話してくれた。私は、祖父の話聞きながら、直接会ってはいない偉大な彼らのことを想像し、そして祖父が彼らのことを心から尊敬しまた大切に思っていることを、子供ながらも感じとることができた。祖父洵が、信念として書いたものに「不屈不撓」がある(図 3)。

まさに、実践するからには必ずやり遂げるという覚悟で、学問に社会事業に打ち込んでいたのだと思う。そして、その源は 13 歳で札幌農学校に入学し初めて出会った新渡戸稲造博士の「世のため人のため」の考え方であったと思う。

洵は、米寿を祝い(写真 11)、1970(昭和 45)年 91 歳の時に当時史上最高齢で日本学士院会員となり、1972(昭和 47)年 9 月 25 日に満 93 歳で永眠した。

引用文献・参考文献

- 1) 入江 遠編 (1994) 入江九一資料集. 320p.
- 2) 北大馬術部 web サイト (北大馬術部沿革)
<https://hokudai-horse.xsrv.jp/enkaku/index.html>
- 3) 札幌市 (1997) 新札幌市史 第 4 巻 通史 4, 第八編 転換期の札幌 第九章 大衆文化・モダニズム・文化統制 第三節 美術.
- 4) 池上重康 (2007) 桑園博士町「村会日誌」、北海道大学大学文書館年報, 第 2 号, 2007 年 3 月, 95-122.
- 5) 杉野目 浩 (2008) 財団法人仙台学寮関係資料<解題>. 北海道大学大学文書館年報, 第 3 号, 2008 年 3 月, 174-193.
- 6) 北大山岳部 web サイト (北大山岳部年表)
<https://aach.ees.hokudai.ac.jp/xc/modules/AACH/chronicle.htm>
- 7) 札幌市白石区老人クラブ連合会編 (1978) 白石歴史ものがたり.